

前1千年紀の集落址と採石場址

—エジプト・アコリス遺跡の調査 2019—

花坂 哲 東京都立大学客員研究員
川西 宏幸 筑波大学名誉教授
辻村 純代 古代学協会客員研究員

Non-elite Settlement and Quarries during the First Millennium BC: Akoris Archaeological Project 2019

HANASAKA, Tetsu Visiting Researcher, Tokyo Metropolitan University
KAWANISHI, Hiroyuki Professor Emeritus, University of Tsukuba
TSUJIMURA, Sumiyo Visiting Researcher, The Paleological Association of Japan, Inc.

花
坂
哲
ほ
か

1. はじめに

アコリス遺跡はカイロから南へ約 230 km、ナイル河東岸を南北に連なる段丘上に営まれ、東側から北側をワディが取り巻いている(図 1)。独立峰状に聳える岩山の北側に、プトレマイオス朝期やローマ期の神殿や日乾レンガ製の住居群が残ることから、一般には当該期の都市遺跡として知られている(図 2)。しかし、岩山の南側(南区)の発掘調査によって、第3中間期おそらくは新王国時代末期にはすでに都市としての体裁を整えていたことが判明している。2002年にこの南区の発掘調査に着手して以来、居住した庶民層の生産活動や交易、信仰、埋葬など多角的に調査研究を進めてきた。その結果、統一王権体制が崩壊し、衰退・混乱の時代として語られる新王国時代末期から第3中間期において、在地集落に暮らす庶民層の活動は活発の度を加えたことが明らかになりつつある。

南区における人びとの活動は、北斜面中腹の公共的な、おそらくは軍事的な機能を持つ東西大壁の造営を端緒とし、これと同時にやや遅れて、集落の形成が始まった(図 3)。庶民層は農業と漁業を生業としていたが、同時に小規模ながら織物、編み物、金属加工、土器作りなどの手工業も行い、さらに、前代まではエリート層が独占していた技術と言えるガラスやファイアンス製品の製作にも着手していたことが判明している。また、フェニキア型のアンフォラやピルグリムフラスコなどの輸入土器の出土は、遠方との交易・交流があったことを窺わせる。ところが、庶民層によるこのように活発な生産・交易活動も第3中間期中頃には

衰微し、集落は過疎化し、それと前後して次第に放牧地や墓域に転じていった。

その後、ギリシア・ローマ時代になり、岩山の北側に主要な居住域を移した人びとの経済活動を支えたのは石灰岩の採石であった(図 4)。遺跡近傍では、現在も数多くの石灰岩の採石場が操業されているが、古代においても、元来の地形を変えるほどの石材を切り出していた。15 km ほど南方のニューメニア地区の採石場は、とりわけプトレマイオス朝期に活況を呈していたことが、残された作業記録のグラフィティから明らかとなった。オベリスクを切り出そうとした痕跡や、完成すれば高さ 20 m に及ぶファラオ立像を製作しようとして、岩盤面にその姿を線描した巨大なブロックなどが残る。その立像と対となるものを切り出そうとした痕跡がアコリス南採石場でも見つかっている。

2019 年度の調査は 2019 年 12 月中旬から 2020 年 2 月上旬にかけて、南区の南西端岩盤沿いで発掘調査を、ニューメニア採石場でグラフィティ調査を、アコリス南採石場で巨石の周囲と下方の測量をそれぞれ実施した。なお、2019 年度調査を終える頃に始まったコロナウイルス禍によって、2020 年度の現地調査は断念せざるを得なかった。

2. 南側斜面の南西端区域

南に向かって緩やかに上がる斜面の南西端が 2019 年度の発掘区である(図 5)。2015 年度に調査を開始した南区の南端区域は、斜面上方に営まれた後代の岩窟墓の造営やその盗掘に伴って排出された礫層が厚く堆積している。2017 年度調査で、その礫層を東西 25 m、

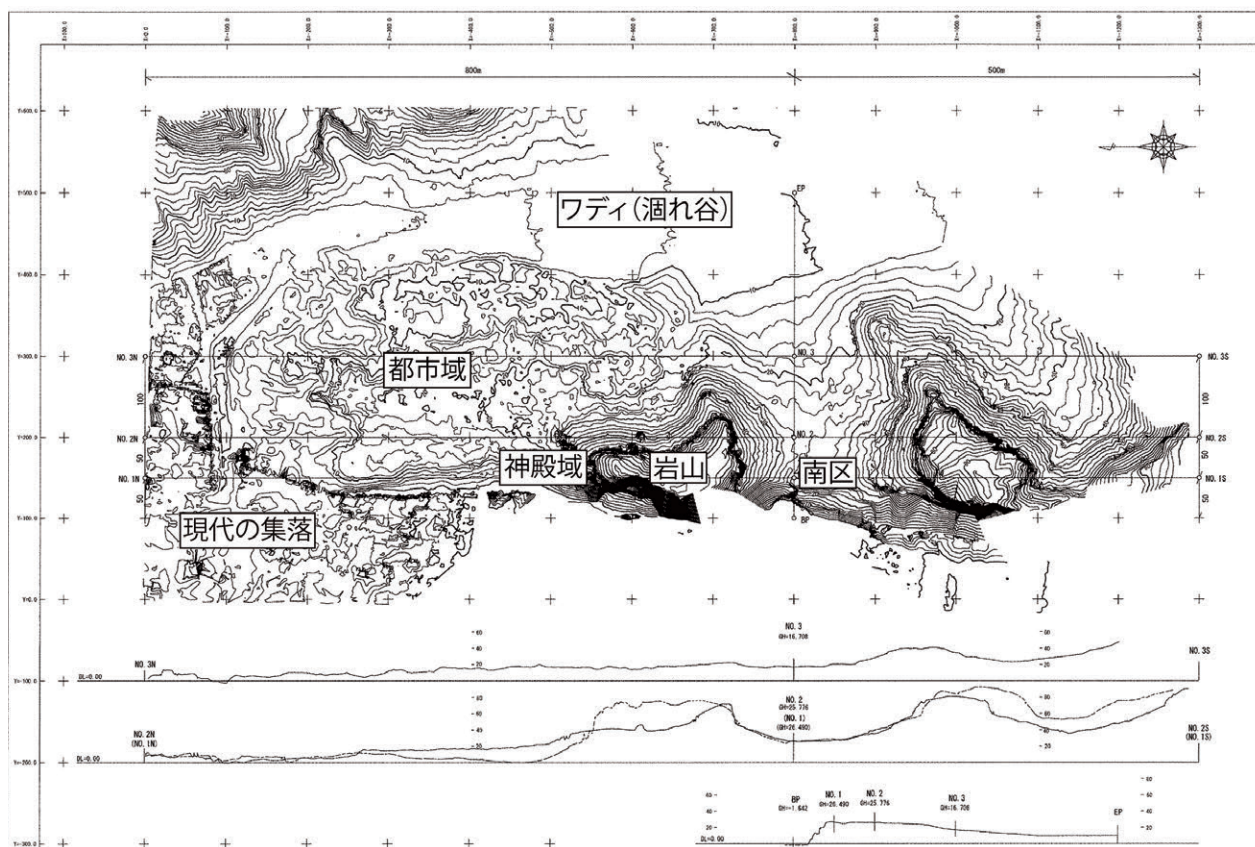


図1 アコリス遺跡等高線図



図2 岩山北側の都市域(北から)



図4 ニューメニア採石場址



図3 南区全景(南から)

南北10mほどに亘って除去し、岩盤沿いに東西に並ぶ複数の部屋を検出した。続く2018年度調査で、部屋の内側に堆積していた天井あるいは上層階の床を構成していた木材や粘土を除去し、各部屋の精査を行った。そして、2019年度は一部露出していた下層のレンガ壁の検出を行った。

層序関係、土器編年、建造物を構成する日乾レンガの大きさなどから勘案すると、一帯の活動時期は大きく4期に分けることができる。すなわち、この地区が過疎化し、墓が造られた時期をI期とすると、2017・

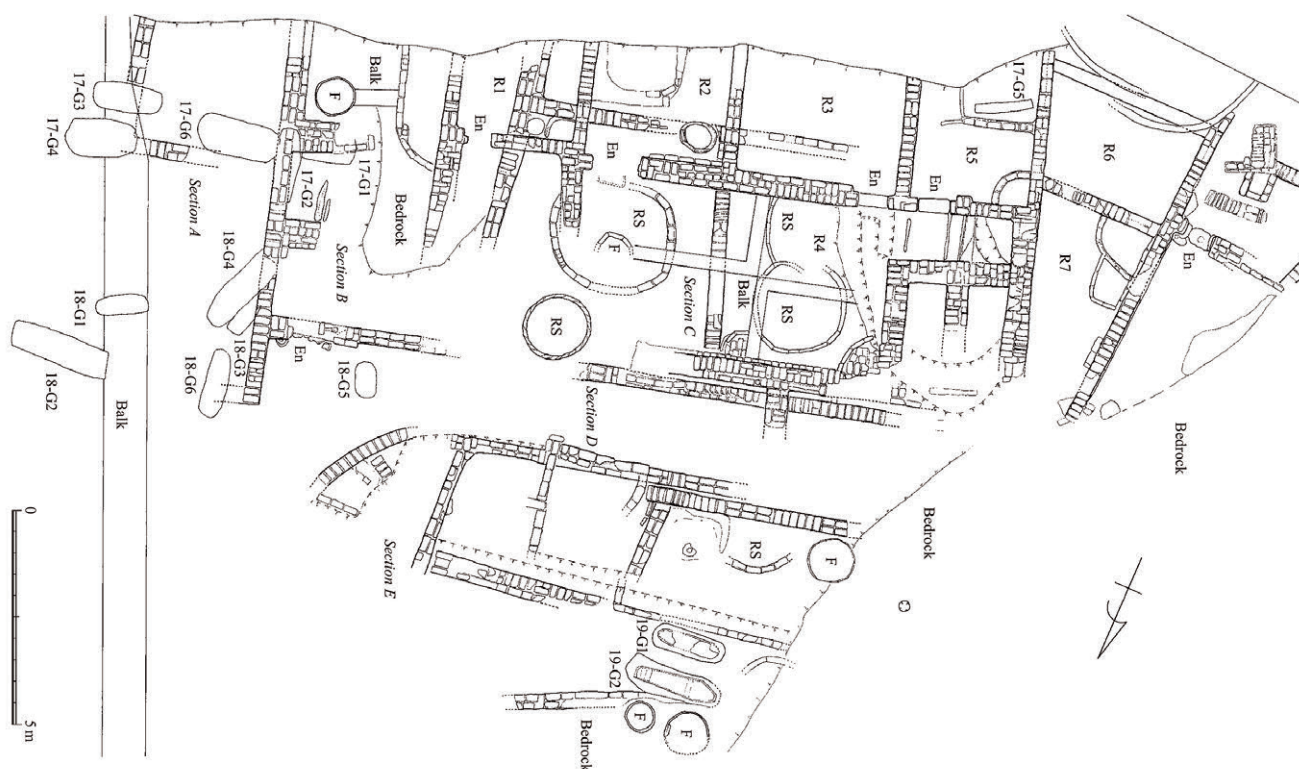


図5 2019年度発掘区平面図

2018年度に検出した岩盤沿いに並ぶ部屋群がⅡ期、2019年度に検出した下層の日乾レンガ列がⅢ期となる。Ⅱ期とⅢ期のレンガ列は、基本的には同じ方向に並んでおり、一部で上下に重なる例があるものの、すべてのレンガ列が同じ場所で作り替えられているのではない(図6)。また、詳細は今後の調査で明らかとなるが、さらに下層にも日乾レンガ列が確認されている(Ⅳ期)。出土土器の編年などから、Ⅱ期とⅢ期は第3中間期に該当し、Ⅳ期は新王国時代まで遡ることが推察される。

また、部屋群の東方(Section A)では、レンガ列の遺構が確認されておらず、織機も見つかっていないが、アマ植物を細く裂いて束ねたものや、木製紡錘車や土製織物用錘などが大量に出土することから、織物工房の存在が強く示唆されてきた。その堆積層はⅢ期のレンガ列を覆っていることから、工房はⅡ期に操業されていたと考えられる。また、工房堆積層の下層からは、Ⅳ期に遡るレンガ列も見つかった。しかし、セクションベルトを越えた、調査区外の下層に潜っていくため、来年度以降に調査をする予定である。

2019年度の調査では、Ⅱ期に該当する7部屋のうち、R1からR4の下層からⅢ期に遡る3つの部屋を確認した。これらを仮にEast Room、Middle Room、West Roomと名付ける。East Roomは、西壁がR1内のほぼ中央の下層から検出されており、おおよそ南



図6 Ⅱ期とⅢ期のレンガ列の検出状況(南から)

北6.5m、東西5.0mを測る、南に向かってやや広がった台形を呈している。北壁に設けられた出入口にはアカシア木材の敷居が置かれ、ドアの軸受けを兼ねていた。次に、R4を東西に二分するような位置から下層の南北壁が検出され、その東側がMiddle Room、西側がWest Roomである(図7)。Middle Roomも、北側がやや広がった、5m前後の台形状を呈している。南壁はEast Roomの西壁に取り付き、R1とR2の部屋内を横断するように西へ延びている。その一部が壊され、半地下式の貯蔵穴が作られていた。日乾レンガを積んで作られた貯蔵穴は、底面の直径が70~80cmを測り、上部に向かってわずかに閉じていく。上端は壊れているため正確な深さは分からないが、残存する



図7 Middle/West Rooms と円形遺構群(西から)



図8 調査区西端域(北西から)

壁の高さは115 cmを測る。後述するように、内部から人骨が出土したが、検出状況を見ると墓として使われたとは考えにくく、R2が居住の場として使われなくなった時期に他所から運ばれた人骨が廃棄されたと推察される。他にも石灰岩製の円形の蓋とドア軸受け、皮革ブーツ、亜麻糸製の網が出土した。もう一方のWest Roomは、西壁が岩盤と上層のⅡ期の壁によって確認できないが、他の2つの部屋と同様の大きさであったと思われる。また、West Room内からは、大小4基の円形遺構が検出され、それらが部屋のほとんどを占めている。同様にMiddle Roomのほぼ中央からも、直径2.5 mほどの円形遺構が検出されているが、これらの円形遺構の内部を掘り下げていないため、詳細は来年度以降に明らかにする。なお、部屋と円形遺構のレンガ列の基礎のレベル高を比べる限り、部屋よりも円形遺構の方がやや古い時代のもと思われる。

Ⅱ期のR5、あるいはⅢ期のWest Roomの西方に位置する、Ⅱ期に属するR6とR7は岩盤直上にレンガ壁が作られており、Ⅲ期の構造物は存在しない(図8)。さらに西方にもレンガ壁が確認されたが、礫層が



図9 Section D と E(北から)

厚く堆積していたため、2019年度調査では住居群の西端を明らかにすることはできなかった。

2019年度は北方に調査域を拡張した(Section D & E)。斜面下方のSection Eで、Ⅲ期の建造と考えられる2つの部屋を検出した。これらは東西に並んでおり、東側が南北2.9×東西4.6 m、西側が南北2.7×東西4.3 mを測る。両者の南壁と北壁は一直線上に並んでいるものの、連続していないことから、建造時期が異なり、さらにⅣ期まで遡る可能性もある。また、斜面が終わり、平坦面に近づいた北端では2基の焼成窯が見つかった(図9)。Section Eの北壁と、上方の部屋群の南壁に挟まれた細長い区画のSection Dは、当初、斜面上下に展開する住居群を東西に貫く道路だと想定していた。しかし、これまでに検出された道路の堆積とは様相が異なっており、さらには住居に伴う床面と思われる硬化層も検出されたことから、道路であったとは考えにくい。とはいえ、ここが道路でないとすると、住居内を横断することになるため、来年度以降の課題として残る。

3. 人骨の調査

南区南西端域では、2015年度から2018年度までの4シーズンで36基の墓を検出した。2019年度の調査では、前述したMiddle Room内の貯蔵穴から見つかった人骨の他に2基の墓がある。この2基はSection Eに頭を西に向けて並んでおり、1基は20代後半女性が被葬者の土器棺、もう1基は30代後半男性が被葬者の人形木棺であった。両者ともに後代の盗掘によって荒らされており、棺の蓋は見つからず、人骨も一帯に散乱していた。R2内の貯蔵穴には4体分の人骨が遺棄されており、20代男性、10代女性、幼児の3体分の人骨と、いずれにも該当しない大腿骨が1本



図10 R2と貯蔵穴内の人骨出土状況

だけ見つかった(図10)。

人骨の分析から、20代後半女性は重度の歯周病に罹患していたと考えられる。また、R2内貯蔵穴から出土した3体ともに眼窩にcribra orbitalia(眼窩篩)が確認でき、うち2体には歯のエナメル質の形成不全(enamel hypoplasia)も見られることから、栄養状態が良くなかったことが窺われる。なお、前述した出土品のうち、10代女性の頭蓋骨に付着していた皮革ブーツは副葬品であった可能性が高い。

また、2016年度に出土した人骨の精査も行った。2016-11号墓出土人骨の頭部には、長さ5cmほどの鋭く深い切り傷が残っていた。傷の向きや角度から、手斧(adze)のような片刃の刃物でつけられた傷と考えられ、これが致死傷となった可能性がある。

4. ニューメニア採石場址の調査

遺跡から15kmほど南方にあるニューメニア地区に近接して、プトレマイオス朝期からローマ期にかけての大規模な石灰岩採石場址がある。約1kmに亘って南北に細長い溪谷状を呈した景観となっており、谷の両側に露天掘りや横穴式による採石の痕が残る。それらの壁面には、ギリシア語とデモティックの二言語で併記された「治世年・月日」、「人名」、「3つの数字」で構成されるグラフィティが残っており、プトレマイオス2世から4世の治世に大規模な採掘が行われたことが明らかとなっている。

2019年度は、谷の西側南端に位置する、15×6mほどのSection Nの調査を再開した。2つの大きな石材(Block AとB)を切り出すために周囲に溝が削られ、岩盤から切り離すために、石材の下面も掘り進められている。Block Aの下面には計34点のグラフィティが残り、その内訳はギリシア語が14点、エジプト語

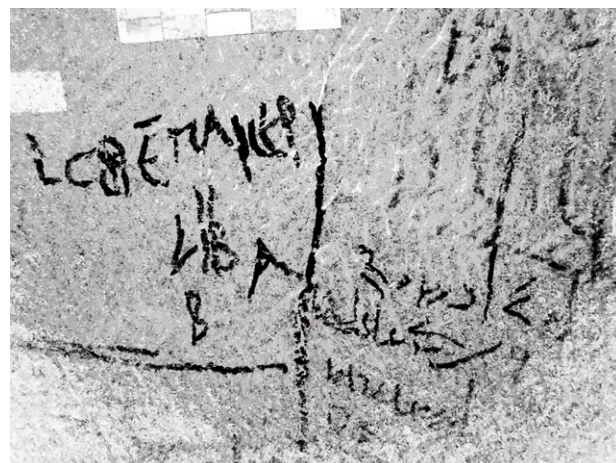


図11 2言語で併記されたグラフィティ

が19点、不明が1点である(図11)。一方で、Block Bの下面では、ギリシア語5点、エジプト語6点の計11点のグラフィティが確認された。両者の年号は、ギリシアの財政暦で治世6年が記録されており、おそらくプトレマイオス3世の治世年を指している。

興味深い点は、「pais」という単語が使われていることである。これが「子供」ではなく、「奴隷」を意味するのであれば、この採石場で採石に従事する人々が奴隷であったことを示す初めての証左となる。そして他のセクションにおいて、作業従事者が自由な立場であることを示す「el」(el(eutheros)またはel(euth-erolatomos))の語と対比して用いられたことになる。ただし「pais」は「子供」を意味するとも解釈できる。そうであるならば、狭い溝や横穴での作業に適した子供が従事していたことを想像させる。いずれにせよ、多方面からのさらなる分析調査が必要である。

5. アコリス南採石場址の調査

ニューメニアの採石場址に残る22×8mを測る巨石は、周囲に深さ8m以上の周溝が掘られ、上面には横向きのファラオ立像が線刻されている。一方、南区南方の岩丘上にあるアコリス南採石場址の巨石は、後代の再利用のために表面にファラオ像の線刻は残っていないものの、ほぼ同規模であることから、ニューメニアの巨像と対になるものと考えられる。少なくとも1400tにもなる巨石の周囲には、幅45~50cm、深さ9.8mの周溝が掘られているが、岩石片が厚く堆積しており、それは巨石下方の地下空間も埋めている。また、堆積中には、第3中間期・末期王朝時代からコプト期までの土器片が含まれており、採石場の起源が王朝時代に遡ることを示唆している。

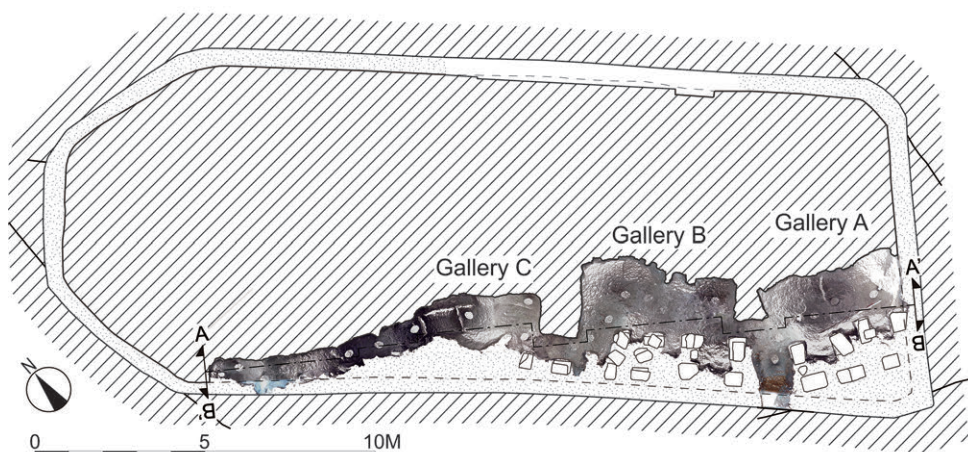


図12 アコリス南採石場の巨石下空間の平面図

昨年度に引き続き、2019年度調査では地下空間のグラフィティの有無の確認に主眼を置き、堆積した土砂の除去を行った(図12)。残念ながらグラフィティは確認されなかったが、残された空間や石材の大きさや形状から作業形態が復元された。すなわち、高さ70～90cmの地下空間で作業する際には、工人はしゃがんだ姿勢でノミを用いており、作業がしやすいように、岩盤の床には細かいチップや粉を9cmほどの厚さに敷いていた。一方、周溝を掘る際にはツルハシを使って垂直方向に掘り進めていた。なお、狭い作業空間において、ランプや松明などを用いた痕跡が一切見当たらず、工人は周溝から入り込む自然光を頼りに作業に従事していたことが窺われた。

参考文献

- ・ Kawanishi, H., Tsujimura, S. and T. Hanasaka (eds.) 2020 *Preliminary Report Akoris 2019*.
- ・ Kawanishi, H., Tsujimura, S. and T. Hanasaka (eds.) 2019 *Preliminary Report Akoris 2018*.
- ・ Kawanishi, H., Tsujimura, S. and T. Hanasaka (eds.) 2018 *Preliminary Report Akoris 2017*.
- ・ Kawanishi, H., Tsujimura, S. and T. Hanasaka (eds.) 2017 *Preliminary Report Akoris 2016*.

調査参加者

川西宏幸・辻村純代・内田杉彦・小川拓郎・清水麻里奈・周藤芳幸・高橋徹・高橋亮介・土居紀子・花坂哲・水戸部秀樹・望月芳・安岡義文・和田浩一郎